

其頃の天下の有様はどんなもので有つたかと云ふに、いつの世の中でも無常迅速の例へを遁のがれれないものは人の命である。西洋の詩人の歌つた様に、死といふ神は王公貴人の家も平民の家も一樣に見舞ふものである。先づ寛文の元年七月には水戸の中納言源頼房卿がなくなつた。この卿は家康第十一の子であつて、世に名高い水戸黄門光圀卿の父である。水戸の人は威公あきこうといつて居る。此侯の死ぬ前に光圀卿に遺言があり、追腹おまぼろといふことは諸家でも仕來しきたつたことではあるが無慈悲の至りであるに因よつて、我等遠行いそんかうの砌は一切追腹をさせぬことにしたいと申付けた。光圀卿も父君の仰せ如何にも御尤おほよしもの思召にて、御仁心じんしんの至り誠に以て感泣かんなきいたすとあつて、愈いよく頼房遠逝えんせいの時に、日頃殿の恩を蒙かぶつた武士が追腹を覺悟して居たのをそれはならぬ、父君の御遺言であるから追腹は思止おもひとどまるやうにと申付けた。然るに是迄の例にないことであるから大分不服な者があつて、一應では聴き入れさうにもない。そこで光圀卿も種々心配して、わざ／＼追腹を切らうといふ家來の家を廻り、再三再四説諭せつゆしたので、やう／＼納得して水戸家では此時から追腹といふことがなくなつた。これは仙臺の古内主膳が義山公に殉死してから、たつた三年目であつた。丁度此時分であつた。三月許ばかり後おくれて會津の城主正四位下右中將松平肥後守正之朝臣まさゆきあそんの家でも追腹禁制の命令があつた。此正之朝臣は前將軍家（家光）の舍弟しやていであつて、奥州會津二十三萬石を領し、當將軍家補佐の重任うけつとを承うけつた人で、會津人が神公しんこうといつて今でも其徳を慕つて居るのは此人のことである。光圀卿や正之朝臣のやうな方が居たので、後には柳營りゅうえいの武家諸法度にも殉死禁制といふことになつた。是れは寛文三年の事である。扱さ寛文二年の三月には名高い智慧

伊豆といはれた、例の松平伊豆守信綱朝臣が六十七で死に、其七月には酒井讃岐守忠勝入道空印が七十六で死んだ。これは皆柳營の古老で立派な政治家であつた。此忠勝入道空印と伊豆守とは丸で性質の違つた人物であつた。伊豆守は才子で、氣がきいて決斷が早く、道理にさとくて、其頃の評判にも剃刀の刃を渡るといはれた程の人であつたが、空印入道はむしろ堅くて、大事取りで、或る點から曰へば頑固であつた。其代り所謂六尺の孤を託すべしといふやうな風があつた。昔から江戸の言傳へに、三河武士の風儀は伊豆守から變つたといふ。それは智慧伊豆が智慧をふり廻して剃刀の刃を渡つて見せたので、三河武士一統其風に化せられて、武骨なかい風が變つて恰愾ものが多くなつたといふことである。しかし空印入道は伊豆守よりも年輩ではあるし、家柄も三河武士の歴々であつたから少しも古の三河風を失はなかつた。若し智慧伊豆が三河風を改めた改革主義の先導者と云ひ得べくば、空印入道は三河風を維持した保守主義の大將であつた。しかし此二人も共に無常の風にさそはれてしまつた。

偕斯様に昔者が段々少くなつてくるにつれて學問はいよ／＼盛んになつて來た。全體日本人は學問を尊ぶ人種であるといつて宜しい。東鑑にある義經の腰越狀などを讀めば、源平時代の武人でも中々文學の志があつた事が分る。南北朝の戰爭の間にも太平記だの、徒然草だのと云ふ立派な著述が出来て居る。足利の時代には謠曲と云ふものが發達して、元時代の支那の戯曲の眞似をして中々上手に出來た。それから戰國の時になつては弓矢鐵砲の世の中になつて、文學などは丸で衰へてしまつたけれども、猶武將の中には詩歌などに心掛けたものもあつた。即ち毛利元就と云ふ人は歌が上手で、春霞集と云ふ歌集があつた。それから上杉謙信、武田信玄は詩を作つた。信州の坂城の近所のなんと云ふ寺に信玄の作つた詩が残つて居ると云ふことを或本で讀んだこ

二 六尺の孤を託すべし 幼君を助けて一國の政治を任せられる君子について云ふ。出典一論語

とがある。其詩は「一重白美一重紅、鋤破招堤西又東、別有閑田佳景在、或時種月時風」といふのであつた。謙信の詩人であつたことは霜滿軍營云々の詩で誰でも知つて居る。上杉の家來の直江山城守兼續などは詩に於ては寧ろ黒人といつてもよい程の名人であつた。伊達の權中納言正宗卿の詩歌が上手であつたことは前に話した。家康なども生涯戰爭ばかりして居た人なれども、年寄りてより學問に志があつたものと見えて、東鑑などを人に貸した文章が残つて居る。英國では昔、「マグナ、カルタ」といふ大憲章に名を連ねて書くべき貴族が自分の名が書けなくて、其頃の仕來りで名の代りに十の字を書いて置いたものもあつたと云ふ話であるが、日本ではいかなる戰國でも自分の書判が書けぬ武將はなかつたやうである。これは實に日本が世界に誇るべき歴史であつて、日本では如何なる時代でも學問の丸で輕蔑せられた時代はないと云つてよろしい。しかし其中でも明曆寛文頃は學問の益々行はれた時である。先づ水戸の光圀卿、會津の中將正之朝臣、備前の池田新太郎少將、此三人は柳營の親類で本身であつたが、共に學問好きであつた。中にも新太郎少將は英雄の名高き大名であつて、熊澤蕃山先生を用ひ學問を政治に應用し、餘り強く理想的の改革をしたので空印入道などに睨まれ、蕃山は隱居するの己むを得ざるに至つた。斯様に一方には學問が盛んになつて來ると同時に、一方には幕府の勢は倍々旭の上る様になつて來た。其頃の流行物を書いた本に、武士が出世しようと思つて三河言葉にせ廻り、そらいんぎんのきつとはと云ふことがあるが、柳營の威勢が盛んで三河武士が天下は己の舞臺よと言はぬ計りに威張つて歩行いた有様が思ひやられる。昔、足利の時武家が關東から出て京都を取つたれば、京都の公家が東夷の眞似をして關東言葉を使つたと言ふことが太平記に書いてある。近頃薩摩男がはびこつた時分に薩摩男でない者も薩摩言葉を眞似するものもあつた。いつの世も同じこ

三 一重白美一重紅以下 ○「鋤破」は、

「悪いものを取り除く」の意の「鋤」に、「やり抜く」の意の「破」が附加した形で、この場合は、「すつかり清める」の意か。

○「招堤」は「寺、伽藍」の意。○「種月」は禪で云ふ「耕雲種月」の「種月」か。

「耕雲種月」とは、雲を耕し月に種を撒くが如き自由闊達な境地を云ふ。因みに、信玄は坂城の或る寺を「耕雲寺」と命名してゐる。○「風」は、「風月」、「風流」、「風雅」の意か。

次に試みに書き下し文を掲げる。

一重の白美一重の紅、鋤破す招堤西又東、別有閑田有り佳景在り、或時は種月或時は風。

四 書判 昔の文書の末尾に書いた署名。

五 そらいんぎん 空感慙、剛氣で鳴る三河武士は、京で長く戦つた爲、その言葉には優しい京訛りが混つてゐた。それを「そらいんぎん」と云つた。

六 きつと 急度。きつちり。必ず。

七 はる 張る。意氣地を貫く。意地を押し通す。

とである。眞似らるゝものは善いが、眞似るものゝ面皮は厚いと云はねばならぬ。

斯様に古老が追々なくなつたに就て柳營の政治は自然新しい人物の手に落ちた。酒井左少將忠清朝臣と云ふは前橋十萬石の城主で、これ迄は老中と一所に奉書に連署して先づは老中同様ではあるが、唯家柄の善いのと高取りといふ處で少しく叮嚀な會釋を受けると云ふのみであつたが、寛文三年から三萬石加増になつて大老職を申付けられると云ふことになつた。尤も其前の年寛文二年三月三日に讃州高松の城主松平讃岐守頼重、江州彦根の城主井伊掃部頭直澄の兩人に、向後は老中同列にて御政治を談じ、御用の節は御次の間に相詰め申すべしと將軍の直命があつた。これは溜間詰と云ふものゝ始めである。後に至りて會津侯を加へ溜間詰三藩となり、其後には松山、桑名、忍、姫路なども其中に加はつたが、始めは三藩であつて、伊達騒動の時分には彦根と高松との二藩であつた。多分其頃の古老の考へで何うも老中に政治を任せ切りでは弊害があるであらう、何んでもこれは老中の仕事を監督する目附役のやうなものをこしらへて、將軍の相談相手にして老中に政務を監督させたら善からうと云ふので、それで斯様な高等の政治機關を設けたものに相違ない。それをたとへて曰へば老中の用部屋は今の内閣である。そして溜間詰は今の樞密院である。かういふ者が出來て居れば、たとへば大老であるからと言つて決して専横な事は出來ない筈である。しかし其れにも關はらず酒井侯の勢ひは中々盛んなものであつた。其頃の風聞を書いたものに、やんごとなき一の人の有様は雅樂なりとある。又酒井さかゆる繁昌の本と書いてあるものもある。或る本には、前橋侯は將軍家の親任が厚く、威勢が強かつたので、時の人が下馬將軍といふ渾名をつけた。それは屋敷が下馬先きにあつたからであるとも書いてある。隨分威勢を揮つた人に相違ない。伊達兵部少輔の子息市正宗興といふ人は即ち此人の婿であつ

八 奉書 臣下が上意を受けて命令を傳達した文書。

九 溜間詰 親藩や譜代大名の中、江戸城内の黒書院溜間に詰める席を持つ大名。將軍や幕閣の政治顧問の役割を擔ふ。

十 下馬先き 江戸城の大手門の廣大な廣場。門内に馬に乗つて入る事を禁じる「下馬札」があつた。

た。それから此外の老中には先づ稻葉美濃守正則といふ人があつた。此人は明暦三年九月に老中になり、從四位下に敍し、寛文元年十二月侍從になつた老中での古參であつた。人物は着實な方であつたらしい。次に久世大和守廣之、此人は寛文三年八月十五日に若年寄から老中になつた。土屋但馬守數直、板倉主水正重矩、此兩人は寛文五年十二月老中になつた。共に幕府時代の名相であつて、殊に土屋數直朝臣は才物の名が高かつた。板倉主水正はのちに内膳正と云つた人で、伊達騒動の事を捌ぎした人である。其時世上の評判に學問好きは内膳、大和、井上河内と云つて、板倉侯と久世大和守とそれから井上河内守は殊に學問を好んだと云ふ事である。斯様な人物を引立て老中にして、其上に立つて大宰相になつて居つた下馬將軍の人物が一通りでなかつたことは察しられる。後になつて嚴有院（家綱）が薨去した時、忠清は京都から皇子を申下して將軍家にしようといつたなど、云ふ浮説を立てられたが、兎に角忠清が一通りの人物でなかつたことは分明である。